

Photographic Society of

Zone System

ゾーン・システム研究会会報

発行日：98'5/1

発行者：中島 秀雄

編集部：

編集レイアウト：篠原 康之

内田順

vol 10

CONTENTS

- ・ 展覧会を振り返って
- ・ 展覧会の感想をいただきました
- ・ 樹氷の丘ピラタス撮影会
- ・ ゾーン・システム テクニカルアドバイス
- ・ ベストウェブ
- ・ Black and White Paper
- ・ 研究会会員必見の写真展！
- ・ 静物写真撮影会の案内
- ・ 博物館 明治村
- ・ 売ります買います
- ・ お知らせなど



展覧会を振り返って

—中島秀雄—

研究会が発足して今年で四年になる。今年はどんな作品が集まるのか、楽しみでもあり気にもなる。毎年発表するとなると、それなりのクオリティーが求められるし、写真の意味や研究会の存在自体も問われるようになるだろう。幸いにも、大変熱心な会員が増えてきているので心配する事は無いかもしれない。期待したい。

昨年の展覧会は、来訪者もほぼ前年並みにあり、我々の表現のスタイルをある程度公表できたという意味で成功と言えるだろう。様々なジャンルの方々から展覧会について声をかけられるようにもなった。また展覧会を通して確実にグレードを上げてきている会員もいて、嬉しくもあれば、一方で基本的な部分にまだまだ研究が足りない会員もいる。

今回、個々のロケーションの中から出てきた作品に、いいものが多くあった。限りある時間をうまく使って、どんな被写体と出会うか解らないが、とりあえずカメラをかついで出向いた努力の勝利で、熱いものが伝わってきた。また、自らの周辺に美しさ

を見つけた力作もあり、美しい被写体は周辺にもあることを気づかせてくれた。そして、撮影会からの力作もあり、改めて撮影会の重要性に気づいた。

鳥海山のようなハードな撮影会もあるし、ハケ岳のように優しい場所もある。スタジオでのライティングによる撮影もあるし、様々な体験の中に美しさを求めなければならない、写真の宿命でいたしかたない。

特に研究会のメインでもある遠方ロケは、新たな被写体との出会いを求める重要な活動になっている。そこで見つけた素材や光の全てにゾーンシステムは対応できる。エドワード・ウエストーンは「自宅ではイメージは湧いてこないが、ロケーションに出ると泉のごとくわき出る」と、言っている。

日常生活の繁雑さから開放されてはじめて物を純粋に見ることが出来るのだ。素材の見つけ方、カメラワーク、露出、また個々の機材を見ることも撮影会での学習の一つでもあり、多くの発見があるはずだ。撮影会の参加により積極性が求められる。ただ、撮影会は実践であると同時に、エクササイズの要素もあって、後日、一人でじっくり取り組むといった努力が今後どうしても必要だ。

様々な活動のなかからいい作品が出てきてはいるが、問題もあって、このままでいいとは決して言えない。展示作品を見ても、そのときの気分や被写体に対する曖昧なイメージがまだ見られ、今後、より明快なイメージにしていかなければならない。プリンティングにも不安定なものがあり、シャープネス、トーンのバランス、きず、折れなどに研究と慎重さが必要だ。

「写真のグレードを上げていけばいくほど、被写体が見つけにくくなる」と言ったのはアダムスだが、我々はとてもそんなことは言えない。まめに撮影してプリントしてみることで、カメラワークや暗室テクニックは休んでいると確実に薄くなっていく。薄くなったテクニックを戻すには時間がかかる。

アダムスのアシスタントだったジョン・セクストンは「やればやるほど、上手くなっていく」と言っている。また写真集、展覧会で作品を見ることはとても重要だ。イメージを成熟させるきっかけにもな

るし、仕事で忙しいとき、今、自分が写真を欲していることを気づかせてくれる。すばらしい写真からは気のようなものが体の中に入ってくる。今流行のアドレナリンがどっと流れる、そんな気分させる。

また、例会に参加することも大事な事だと気づいている会員も多いことだろう。そのとき写真があれば色々な事が語れるし、アドバイスもできる情報交換の場でもある。

電子写真がその性能と利便性を高め確実に映像分野に多く進出してきている。幸い私の仕事にはまだ電子写真は要求されていない。これも時間の問題なのか、もし要求されるようになれば仕事はやめなければならないのか？飯が食えなくなるのか。その一方でシルバープリントに対する感心も決して低くはないし、古典プリント（ソルトプリント、鶏卵紙、フォトグラビア、プラチナプリント、ゴム印画、フレッソプリント）さえ今復活させようという動きがあり、この秋に展覧会を予定しているという。

一人一人の経験や感によって、自らの手から生み出された創造物に対するしなやかな感性は、いつも持っていたいものだ。こういう動きの中での我々の研究会は特異な存在であるには違いない。多くの写真ジャンルがあるなかでファインプリントをめざす人々に影響を与え、我々がめざす写真のスタイルを確立していきたいと考える。

アダムスはゾーンシステムを確立した。そこから生み出されたプリントには美しさが満ちている。しかし、人々はアダムスからどれだけのものを学習してきたのか、私はいつも疑問に思っていた。それが私のゾーンシステムへの出発点でもあった。そして別な角度からアダムスに強い興味を持った人もいる。梅沢篤之助氏である。

梅沢先生はアダムスのプリントとそのテクニックに強く引かれ、アダムスの技術書を7年かけて翻訳してきた。その翻訳シリーズをお持ちの会員もいる。梅沢先生は我々の展覧会にわざわざ神戸からおこし頂いて、見ていただいた。2月のはじめに梅沢先生と会う機会があり、お話を伺うことが出来た。

アダマスに対する思いは大変なものがあり、これからも翻訳を続けていく決意を語っていました。我々の写真に対する感想を聞いたところもっと、ヴァリューを広げなさい。と言うことでした。

ゾーンシステムに熟知していなければ出てこない言葉で、我々にとってきわめて適切なアドバイスだと感じた。トーンの幅を広げるということで、我々のテーマの一つでもあり、この機会に今年の技術テーマにしていきたい。

具体的にはどうするか、フィルムのサイズを大きくする、マイナス現像にもチャレンジしてみる、2浴現像を試みる、フィルム現像液の希釈率を少し高める、引伸し光源をコールドライトに変換するなどが考えられる。

フィルムサイズを上げる、コールドライトに変換する、これがヴァリューを広げる早道だ。

今年は、より強いイメージの作品が求められるようになる。様々な被写体に果敢に挑戦して、シルバープリントの美しさが十分表現出来るよう研究して欲しい。

<研究会から>

*アダマスの技術書「ザ・カメラ」「ザ・ネガティブ」
「ザ・プリント」「イクザンプル」

会員は10%引きになります。会員必読の書です、是非お申し込みください。



写真展の感想をいただきました

写真展を見に来てくれた方から、中島先生宛に感想のファックスが来ましたので、紹介いたします。(編集部)

突然のお手紙すいません。先日写真展におじゃましてケーキをいただいた学生です。ケーキとてもおいしかったです。ありがとうございました。

あのとき、私は自分たちの写真展に出品した私の作品を先輩に酷評され、自信をなくしていて写真に対する意欲が無くなりかけていました。また、写真という個人活動を部活という40人近いメンバーとやっていくにあたり、ひずみが生じていたのです。でも今回の写真でとても感動して、また写真を撮り始めようと思いました。

いろいろな写真展を見てきましたが、写真の原点をこんなにも見せつけられたのは初めてかもしれません。小手先の細工が無かったのもとても共感できました。個人的には「BUNA」が心に残っています。せまってくるような木々の曲線を色のトーンが印象的でした。

写真展全体のグレイッシュな色がとてもよかったですと思います。印画紙などは何を使ってらっしゃるのでしょうか？

私は大学二年なので、まだ一年ちょっとの写真歴です。まだなにも分かりません。満足できる写真を撮ったこともありません。いつも空回りしている気がします。焼き付けの技術もまだまだで、先輩があきれるのもむりないかな、、、なんて思っちゃいます。

でも、ほんとヤル気がでてきたので、明日あたりカメラをもって出歩こうと思っています。

なんだかわけのわからない文ですいません。興奮していて字がかなり汚いので読みにくいと思います。いろいろありがとうございました。よろしければ3月にある私たちの写真展に来ていただけたらと思います。

では寒くなってきていますので、体に気をつけて、いい写真をたくさん撮ってください！！

'97.11.7 T.K

樹氷の丘ピラタス撮影会

- ピラタスの丘撮影日記より -

佐伯勝幸

- 集合 -

98年3月7日(土)から8日(日)の2日間にかけて北八ヶ岳のピラタスの丘にて冬景色の撮影会が開催された。

3月7日の当日は、中央道の八ヶ岳サービスエリアにAM8:00の集合となり中央線沿線方面から4名、横浜方面から2名、川崎方面から3名、西多摩郡から1名そして麻生区方面から先生を含め2名の総勢12名(女性2名)の参加となった。AM8時のサービスエリアから見た八ヶ岳の山頂は、厚い雲に覆われ、雲の動きのかなり速いブリザードの吹くかなり条件の厳しい世界のように思われた。

- 出発 -

諸見里さんの運転する4DWチャレンジャーを先頭に計5台の車は、一路ピラタスを目指して出発した。ピラタスのロープウェイの始発はAM9時、少しでも早く到着したいとの思いでかなりとばしていく先頭車、それに続けと残りの車もかなりとばして行くが、筆者の運転するディーゼル車(4番目)は、前車にどんどん離されていき、やっとなのおもいで、前車の姿をとらえた時には、すでに「諏訪南」のインターを出ていく姿だった。てっきり諏訪インターで降りると思いついていた筆者は、焦りましたが後の祭り、すぐ開き直り、単独で行くことにした。

- 到着 -

遅れること30分でピラタスの駐車場に全員集まった。

撮影準備を含め10時のロープウェイに乗り、モンスターの待つ雲上の世界ピラタスの丘に到着した。ロープウェイから見た外の世界は、標高が高くなるにつれ樹々の様子が変わり、徐々に古木が目立つようになって行きた。それと同じくみんなの目の色も輝いていく。山頂駅に到着し、ドアが開くと同時に「透き通ったというより、突き刺すような空気」が入り込んできた。気温マイナス6℃、吐く息は白

く手足もかじかむ厳しい世界、しかしみんなの写真にかける意気込みは凄まじいものがあった。

— 午前中の撮影 —

山頂は「曇り」、心配していたブリザードは、どうにか吹いておらず、撮影するには十分とはいえないが撮影可能な天候だ。先生曰く、「下見をした先週に比べて樹氷は少ない」日ごとにその姿を変えている様子だ。先生から諸注意を聞き、慣れない雪上を歩きだすこと100m、「まずは、この辺で撮影しましょう」との声がかかりカメラのセッティングが始まる。



誰一人として同じカメラを持つ人はなく、その多くは、4x5inch

のカメラであり、上は諸見里さんのディアドルフ8x10inch。8x10を初めて見る筆者は、その大きさ及び貫禄に圧倒されんばかりで、4x5が子供のように見え、名機ハッセルも赤ちゃんのように感じられた。筆者を含み98年度第4期、新しく入会した3名は、先生から撮影にあたり重要ポイントの説明を受けることになり、新しい知識がまた一つ加わることになった。

ベテランの人たちは、スノーシューで足元を固め、深雪の上でも平気に駆け巡っていた。それぞれのポイントでは「ここだ」という所でじっくり視てアングルを決め、また「今だ」という時期が来る迄じっくりチャンスを待つという感じで、それぞれフィルム1枚にかける意気込みは強く、安易にシャッターを切るものなら置いてきぼりをくらってしまいそうな状況だった。

— 昼休み —

氷点下の世界から入ってきた休憩室は、ストーブの炎が暖かく、凍える手足の先を溶かしてくれるよ

うなところだ。休憩室で販売している食べものは、おでんにカップラーメンとたいしたものはないけれど、みな先程の撮影の様子を話し合い、ホッとするひとときであり、午後に向けて新たに気持ちを入れ替える時間でもあるように感じられた。

— 午後の撮影 —

下りのロープウェイの最終時間が午後4時と早く、許される時間が2時間と残りわずかという中で撮影が始まった。4x5を持ってやっと1年になるうとしている筆者のカメラは、我が師匠である内田氏から譲り受けたハセミフィールドで、師匠の愛情を受けているにもかかわらずそのできは今一步と伸び悩んでいる。

そんな思いの中、頑張っ



付いた雪の結晶を発見。「あと1枚だけ撮りたい」との思いが高

まるが、もう一度セッティングするだけの時間がすでに残されておらず、後ろ髪をひかれる思いで明日に託した。最終のロープウェイは、残る思いをよそに、皆を乗せ下っていった。

— イングルサイド —

この日の夜は、蓼科の森のペンション「イングルサイド」に宿泊することになっていた。場所は、ピラタススキー場の山を越えた谷の中腹あたりにあり、迷いながら到着。途中の道には、今までなかった雪があらこちらに顔を出し、久々の雪道で緊張したハンドリングだった。チェック・インの手続きを行なうため、事務局の内田さんはペンションの階段を駆け上っていった。しかし、もなかなか帰って

こない。やっと帰って来たと思ったら、青い顔をしているではありませんか！。どうやら階段で転んでしまったようで、胸を強く打ち、しばらくうずくまっていたそうです。

内田さん曰く「荷物を持っていなかったのに、走ってしまった。」とのことでした。おかげで他のみんなは、階段を転ばずに登っていくことができました。内田さん、ありがとう！あなたの失敗を無駄にせずすみません。そして、お大事に！（内田さんは、月曜日医者に行き、診てもらった結果、肋骨が折れていたそうです。一週間起きることも笑うことも出来ず、ましては現像することも出来ず、ただ寝ていたそうです。）

悪いことが続きます。菅野さんがピラタスの山の高度に順応することが出来ず、疲労のため寝込んでしまった。しかし、たいしたことはなく翌日には元気な顔を見ることが出来た。夕食は、前菜から始まるコース料理で、とてもおいしくいただくことができた。夕食後は、暖炉のまわりに集まり楽しいひとときを過ごした。ワークショップを受けていない新会員の畑さん、川井さんは、中島先生よりレクチャーを受けていた。外では、私達を歓迎するかのように大きな花火が夜空いっぱい花を咲かせていた。夜も深まり、みんなは部屋にかえて明日の準備としてのフィルム交換に大忙しだった。

－ 最終日の午前中の撮影 －

昨日とはうって変わって青空の見える天気になった。

ロープウェイを降りて、そこに広がる世界はまるで変わっていた。昨日まで樹々に積もっていた雪が全て解けているではありませんか。後ろ髪を引かれながら撮り残した木にもすでに雪はなく、昨日の姿はまるでなくなっていた。「撮影は、撮れる時に撮らなければ後はない。自然は出会いの瞬間であり、その時を大切にしなければなりません」とつくづく感じた。

本日8日の撮影は、縞枯山荘まで足をのぼすことに。山頂駅を出て400～500mの地点で、最初の撮影が始る。まっすぐに伸びた枯れ木が点在する地点だ。枯れ木をZone6にすると雪が9になり飛んでし



まう。
従って、
N-1 現像
をしなけ
ればなら
ない。先
生が筆者
のセット
したカメ

ラをのぞき、撮影に対するポイントを指導していた。

この地点、少し離れた場所でまたもやビッグカメラが花開いた。こんどは2台だ。元気になった菅野さんと諸見里さんの2人。雪が壁になって縞を描いている風景で、あのディティールはやはり8x10でしかできません。みんな同じ場所で撮影。

筆者の私は足をのぼして山荘の先まで行き、枯れた木の撮影をしていたが、気がつく全員帰ってしまったあとだった。-雪の中では一人になると危険です。気を付けましょう。-帰り道、一本の曲がった木に出会う。これは撮らなければならないと思い、近づいていくとそこにはディアドルフが開いていた。道から少し脇にはいったところで、足を踏み入れた瞬間、腰までうもる事態になった。どうにか抜け出した時にまた胸までうもれる深みに入り込み、こんどは助けてもらう始末です。冬の撮影には必ず2人以上で、スノーシューなどで足元を固めて出かけましょう。

－ 午後の撮影 －

撮影会もあと残りわずかになった。

下りのロープウェイの時間は午後4時。そこで諸見里さんは、歩いて下りに決めた。みんなとは違う場所を探して旅立った。背中には重い機材、右手には三脚そして左手にはホルダー10枚。これだけの重装備。一味違った写真を期待しています。

残りのみんなは、少し下がった場所での撮影に入った。そこには、ひときわ大きな枯れ木が、何十年、何百年もの間、周りを見てきたような風格を漂わせながらずっしりと立っていた。そこにひかれるように、すいよせられるように集まり、真剣にカメ

ラを向けました。中島先生曰く、「この木でもものになる作品を1枚は作らねば！」との気合の入ったまなざしでピントグラス眺めていた。みんな1本の木との戦いです。出来上りを期待したいですね。

下りのロープウェイの中から下を見ると、登山道にはスノーシューの足跡がつづいていて、中腹あたりで大きなカメラをセットし、撮影している諸見里さんを見ることができた。その姿を見た一部の人は、下から再び歩いて登りはじめた。まだ日が高い、もう少し撮れるとの思いでしょう。筆者もその一人です。「出会いの瞬間、最後まで悔いを残さないように撮りましょう。」

－ 帰り道 －

夕食を茅野市のレストランで済ませた後、それぞれの町に帰っていった。筆者たち中央線沿線グループは、新入会者3名+内田さんです。車内では、内田先生を囲んでのQ&Aが開催され、相当な知識が蓄積された。行き帰りの時間も大変貴重な時間です。

－ 最後に －

撮影会に参加して色々勉強になった。単に撮影に行くのは簡単です。しかし、こうやって知り合った仲間との撮影は有意義なものです。参加して初めて「あっ そうか！」というような驚きがあります。ささいなことでも大きな進歩です。まだ、参加したことのない人たちは、是非とも一度参加してみてください。きっと勉強になると思います。

最後に、ご指導いただきました先生には深く感謝いたします。ケガまでしてお世話下さった内田さん、また下見してくださいました先生並びに諸見里さん、小野さんにも深く感謝いたします。



4点とも写真提供：宮岡貞英さん



ゾーン・システム

テクニカル・アドバイス

—中島 秀雄—

コンタクトプリントからイメージを選択し、ネガ、ゾーンノートをもって暗室に入る。暗室はすでに準備が出来ている。コールドライトを使う場合は余熱が必要で、5分ほどタイマーをONにして光源を暖めておく。ドジング、バーニングのための道具も必要だ。

<<ワークプリントを作る>>

最初からファインプリントや大伸ばしに進む前に、8x10サイズのワークプリントを奨める。選んだ写真が、重要な写真になるかどうかまだ解らないので、ワークプリントにして試してみるのがよい。最初から大きな印画紙を使うよりずっと経済的で、いろいろなことを試してみるべきだ。

露光を増やしたり、焼き込んだり、覆ったり、時には別の種類の印画紙を使うこともある。写真のジャンルが違うが、水俣を撮影したユージン・スミスは、撮影したすべてのネガをいったんキャビネにプリントして、そこから選び出すという。

最初は手順どうりテストプリントからスタートする。新しいネガの場合、8x10印画紙一枚に、3秒間の段階露光を取る。こうするとすべてのイメージをトーンの変化でみることができ、後のコントロールが容易になる。空は何秒焼き込むのか、周辺は何秒か、一枚のテストプリントは多くの情報を持っている。現像液は常に新鮮なものを使いたい。タンクの底に残った一ヶ月前の現像液はコントラストを落とし、黒のしまりも不足する。液温のコントロールには冬は恒温器を使い、夏はビニール袋に氷を入れてつけ込む。これで、20度±0.5を保てる。液温がふらついているとすべてが無駄になる。

攪拌は連続して行うべきだ。酸化された溶液をペーパーから取り払い、新鮮な溶液が常にペーパーに触れるようにする。これが攪拌の意味だ。停止液も新鮮なものを使う。定着液に入れたプリントは、

新鮮な液であれば1分でビューイングライトはONできる。傾けて取り付けたビューイングボードにプリントを張り付け、コンタクトプリントのトーンと比べて露光時間を見つける。5番目なら15秒になる。

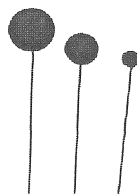
今は第一露光時間だけを決定する。そして、その露光時間でプリントしてみる。このとき何も手を加えずストレートにプリントする。ライトをつけプリント全体をよく見る。黒のしまり、ハイライトの調子、中間のトーン、ピントも確認する。この時プリントレシピに記録を書き込む。日付、内容、ネガ番号、プリントのサイズ、印画紙、絞り、第一露光時間、現像液、現像時間、などを記録する。

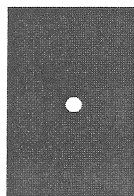
次にプリント全体のバランスをみて、どの部分にどれだけ増減するのかテストプリントから増減時間を見つけ、用紙に記録する。またゾーンノートを見てゾーンの確認をとるのもよい。ゾーンの位置づけが正しく行われたか、必要ならメモを記入する。レシピノートをもってプリントを眺めると、プリントに手を加えなくなるし、プリントをよく眺めることにもなる。

これはファインプリントのテクニックの一つでもあるが、もちろんモルトウイスキーのように何も手を加えない方がいい場合もある。こうして準備ができたらファイナルプリントに入る。

ピントルーペで再度チェックし、タイマーカウントは0にして、タイマースタート。ドジングが必要な第一露光の時に行く。次にレシピを見てバーニングに移る。バーニングに使うボードは光を完全に遮断するものを使うこと。裏が黒で表がグレーの物が良い。

裏が白だとカブリの原因になり、表が黒いとイメージの確認ができず、正確にいかない。投影された映像がバーニングボードの上に映り、それを見ながらバーニングの位置決めをすると正確に行く。そのときのボードの高さと位置も重要で、アダムスはペナンプラをうまく利用するとよいと言っている。最初からうまくはいかない、バーニング、ドジングだけ





のテストを何回もとってみるとよい。アダムスはこれに相当時間をかけると言っている。

この辺の手順がうまくいくようになるとプリントに輝きが増す。ネガが完全な

ものであればよりスムーズにいくはずだ。一枚の印画紙を長い時間セーフライトの下に晒すことになる。なので、セーフライトのカブリテストも必要だ。

一枚のネガから納得するまで続けてみることを奨める。

次回は定着水洗。

<用語>

・ドジング

覆い焼き 語源：Dodge ひらりとかわす、ごまかす

・バーニング

焼き込み

・ユージン・スミス

ライフのカメラマン。水俣を撮り続け、水俣病の原因究明の運動に貢献した。故人。

・コールドライト

引伸機の光源に白熱電灯のかわりに、蛍光灯を使う。発熱が低いことからコールドライトと呼ばれる。拡散光源の代表で、軟らかなプリントになる。光源を安定させるために、余熱が必要。VCペーパー用のコールドライトもあり、号数変換のフィルターは必要ない。

・ワークプリント

作品になるかどうかわからない、試しプリント

・ビューイングボード

定着液の中に斜めに立てかけられたアクリル板で、定着途中のプリントをアクリル板の上に張り調子を見る。作業が終わると定着液の蓋にもなる。

・プリントレシピ

プリンティング記録用紙で、正確なプリントづくりに必携。研究会用として今年度制作予定。

・タイマーカウント

何回露光したのか回数が表示される。会員の渡辺氏が開発したものでまだ試作品。調子がよければ商品化も可能?

・ペナンプラ

半陰影、画面の濃淡の境目。

Black and White Paper

国内で入手可能な印画紙

—中島 秀雄—

RCペーパーが登場した頃、バライタ紙が無くなってしまわないかと心配して、大量に買い込んだことがある。しかし、シルバープリントの美しさが見直され、各メーカーが再び作り始めた。国内メーカーは手に入れられるが、外国メーカーはどうか、現在入手可能なものを調べてみた。なお、文中のD.Wはダブルウエイトです。

Polymax Fine Art Kodak
D.W Neutral Tone and Brightend fibre base
Glossy, Semi Matte
Size 5x7, 8x10, 11x14, 16x20, 20x24

Multibrom VCFB Cold Tone Cachet
Silber-rich Pristine White
Size 8x10, 11x14, 16x20, 20x24

<Graded Paper>

Brilliant Bromide II Zone VI
D.W, Glossy, Cold tone, Rich in Silver
Grade 2, 3, 4, Size 8x10, 11x14, 16x20, 20x24

Elite Fine-Art Kodak
Premium Weight
Neutral tone, For tungsten light
Grade 2, 3, 4, Size 8x10, 11x14, 16x20, 20x24

Ektalure Kodak
D.W, Classic warm tone for Portraiture
Medium contrast emulsion and cream white
Size 8x10, 11x14, 16x20, 20x24

Expo G Graded Cold Tone Cachet
D.W Pure White
Grade 2, 3, 4, Size 8x10, 11x14, 16x20, 20x24

Expo WA Warm Tone Cachet
D.W Warm Tone
Grade 2, 3, Size 8x10, 11x14, 16x20, 20x24

<Variable Contrast Paper>

Brilliant VC II -FB Zone VI
D.W Glossy
Size 8x10, 11x14, 16x20

研究会会員必見の写真展！

ファインプリント、オリジナルプリントなどの写真展情報です。

いい写真。見えますか？

中島先生も沢山の優れたプリントを見ることが勉強になると、おっしゃっています。タイミングを逃すと次になかなか見る機会が無いのが写真展です。是非、見に行きましょう。

オリジナルプリント展 —ファインプリントの世界—

ANSEL ADAMS
WYNN BULLOCK
PAUL CAPONIGRO
IMOGEN CUNNINGHAM
EDWARD WESTON
MINOR WHITE

期間：4/16（木）～5/15（金）
時間：9:30～16:30
（土曜は正午まで日曜祝日は休館）
ただし4/30～5/2は臨時休館

場所：日本大学芸術学部資料館
芸術学部図書館5階
電話 03-5995-8315
西武池袋線江古田駅下車

ポール・ストランド写真展 —アンセル・アダムスに強い影響を与えた写真家— —写大ギャラリーコレクション50点—

期間：4/10（金）～5/15（木）
時間：10:00～17:00
日曜祝日休館

場所：東京工芸大学写真センター
写大ギャラリー

電話：03-3372-1321
中野区本町2-9-5
地下鉄丸の内線・中野坂上下車

ルース・バーンハート&イモージン・カニンハム写真展

—エドワード・ウェストンに魅せられた二人の女性—

期間：4/7（火）～6/28（日）
月曜休館（月曜が祝日のときは火曜休館）
入場料：650円
場所：東京写真文化館
電話：03-3505-2335
港区赤坂3-9-1 紀陽ビル4階
地下鉄銀座線・赤坂見附駅下車
※6/20（土）PM2:00 写真鑑賞会あります。
学芸員のレクチャーあります。

四国・竜串撮影会

5/15, 16, 17, 18に四国、竜串にて撮影会を行います。

高知空港から南へおよそ200キロ、太平洋に面した土佐清水市の海岸に点在する、奇岩・奇勝の場、ここが今回ロケーションの竜串。

この岩場は、エドワード・ウエストンの写真で有名なポイント、ロボス岬に似ていると言われる。『何度でも通いたい』とウエストンに言わせた海岸の魅力とはいったい何か。竜串で、我々は何を見、何を感じるのか、じっくり取り組み、答えを出したい。

静物写真撮影会の案内

—研究会から—

私たち会員は、アダムスの風景写真に強く引かれこの道に入りました。しかし、アダムスも様々な被写体にカメラを向けています。人物はもちろんのこと、静物にも強い興味の対象になっています。また風景写真の中にも、静物写真と変わらない見つめかたで近づいているものもあって、写真の魅力をもより深いものにしています。葉や花、枯れ木の美しいディテールは静物写真の眼差しだし、教会の先頭にある白い彫刻も静物写真といえます。

研究会は、被写体のヴァリューを広げることに昨年からは取り組んでいます。その成果は少しずつ現れていることでしょう。そこで、誰にでも撮れる静物写真撮影会を企画いたしました。

以前、八ヶ岳撮影会でお世話になったペンション『天使の家』にご協力いただき、室内にある様々な小物を撮影してみることになりました。暖炉、ピアノ、食器、香水の瓶、椅子、ドライフラワー他、それらを自由に組み合わせることもできます。当日はペンションを貸し切る予定です。奮ってご参加ください。特に女性の積極的な参加を望みます！参加人数は12人程度です。

日時：7/25（土）、26（日）一泊二日

場所：ペンション〈天使の家〉

希望者は6/13例会までに連絡ください（内田）

詳細は追って連絡します。

博物館 明治村

—研究会から—

名古屋の古谷さんからロケ地にかが？と資料が届きました。

明治村には明治時代の建物が30以上も屋外に展示されています。

建築物のディテールに面白いものが沢山ありそうです。聖ヨハネ教会など、興味ある被写体があります。園内は自由に撮影できるとのことです。近々下見をしたいと思います。研究会として撮影会を実現してみたいですね。

また、皆さんにとっておきのロケ地もお知らせください。

以下、パンフレットより抜粋

ハイカラ・ロマンの博物館、明治村

明治村は明治時代の建物を移し建てて、大切に保存し、ここを訪れる人たちに明治の文化や生活を味わっていただく野外博物館です。

明治は欧米の文化を積極的に取り入れることによって、いちじるしく近代化した時代でした。

そのすぐれた文化の伝統を土台として、新しい日本を築こうとする明治の人たちの意欲と努力を見ることができます。明治村は、そうした明治の人たちの知恵や努力の跡を私たちに語りかけ、建物の一つ一つが活力あふれる明治の心を象徴しています。

売ります買います

◎ビューイングフィルター

6x6用、4x5用 各5個あります

◎デジタルメーター用革ケース

2個あります

◎ゾーンラベル

デジタルメーター用 数枚有ります

◎ストレージ・ボックス

11x14インチ用、多少

中島秀雄

プリントレシピを作ります

別紙で郵送しました、プリントレシピ。いかがですか。ただいま、作成中です。できあがるまでの間、コピーしてお使いください。

<原稿募集>

会員の皆様からの原稿を常時お待ちしております。

今回からインターネットでのホームページ情報も始まりました。情報お待ちしております！（篠原）